

# 世界最古のヒトの祖先はチャド人？

在カメルーン日本国大使館  
(チャド兼轄)



2001年、チャド中部のニジェール国境に近いジュラブ砂漠(Djourab)で、約700万年前の頭がい骨、あごの骨及び歯がほぼ完全な形で残った化石がフランス・チャド古人類調査隊調査チームにより発見されました。この化石は、サヘラントロプス・チャデンシス(Sahelanthropus tchadensis)、現地のトゥブ族系の言葉で「トゥマイ(生命の希望)」と名付けられ、ヒトの祖先なのかどうかについて議論が交わされています。

ヒトの祖先であることを支持するグループは、頭がい骨の構造から直立2足歩行が可能であること、大きく後方に突き出た後頭葉や傾いた脳幹、横に広がった前頭前皮質など、ヒト族の脳の特徴を有することを指摘しています。トゥマイがヒトであると確認されれば、ヒトと類人猿の分岐時期は、これまで考えられていたよりも遡ることになります。

2005年日本国際博覧会「愛・地球博」では、グローバル・ハウスの「人類の起源」展でトゥマイの頭蓋骨復元像が展示されました。

ジュラブ砂漠一帯には、300万年前から700万年前に遡る先史時代の遺跡が多く存在し、トゥマイの他にもアウストラロピテクスや各種動物の化石が多く発見されています。また、チャド北東部のスーダンとリビア国境に接するエネディ(Ennedi)には、約4000年前の洞窟壁画が残っており、ユネスコ世界遺産に指定されています。

現在は国土の大部分が厳しい気候の砂漠や山岳地帯で覆われているチャドですが、太古の昔には豊かな植生に覆われていた美しい地域であったという説もあります。